

けつがれ地方医療の向上に役立った多くの病院などであるが、戦後の医療政策、制度にあたえた思想的影響も無視できない。これらを明らかにすることは、今日の医療政策を理解し、将来の医療政策を推進するうえで大きな役割を果たすに違いないと考える。

(西尾市民病院)

(誌上発表)

## 多聞院日記に現われる精神神経疾患の追加

中 村 昭

前回の本学会総会において演者は「多聞院日記に現われる風病の検討」という演題で発表を行なった。その際に検討したように、風病というのは大体において精神神経疾患である。今回は病名に風という文字が入っていないそれ以外の精神神経疾患を取りまとめて追加する。

前回に発表したのは、風氣、耳風、頭風、中風、風病であり、今回追加するのは、中氣、朦氣、狂氣、狐著狂氣、脚氣、目マイ、氣煩、心煩、カン煩、カンノ虫、氣力虫である。

中氣の用例は「夜ニ及ビ常如院中氣絶入ル、然リト雖、殊ナル儀ナシ」という一例だけである。この日記には前回報告したように中風の用例は多く、それは明らかに脳卒中後片麻痺を指しているが、この用例の場合の中氣というの

は一過性脳虚血症状を言っているようである。

朦氣或はオボロケは今日言う所のボケであり、次のように使われている。「長賢房ハ父朦氣見舞ノ為、田舎ヘ下レリ」「妙法印昨夜ヨリ聊朦氣ノ由、珍事々々」脳動脈硬化性のボケ症状であることが大体想像できる。

狐著狂氣は狐憑つきであり「番条五郎殿狐著狂氣云々」とあり、この時代（天正年間）におけるこの言葉の用例として注目する価値がある。

脚氣はその全てが現代医学で言っているような末梢神経障害と考えることはできないであろうが、病源候論では、「凡そ脚氣病は皆風毒に感して致す所に由る」と述べており、風病の範疇に入れることができる。平安時代の和名類聚抄では脚氣にアシノケと訓をつけているが、この日記では次のようにカツケと書いている。「昨日ヨリ足煩、カツケ心ナリ、全ク立チ難キ間出ズ」

目マイは現代語の目舞と同じであり「目マイ以テノ外煩ウ、北院殿御薬二包申シ出、則時減ヲ得タリ」「屋ヨリ出ズ、ヨコネハ良シ目舞不食」の用例がある。

気煩は気分不快という程度の意味であり「一日気煩平臥

セリ」とか「風引ニヨリ気煩、一日平臥セリ」とか用いられている。心煩というののも次のように気煩と同じような意味で用いられている。「心チ煩ウ間談義ニモ付カズ、坊ヘモ出ズ、先年モ連々此クノ如キ時、風氣心ニテト仰セ：」カンノ虫、カン煩は次のように同じ意味で使われている。「藤政カンノ虫ニテ目煩ウ間、高山一段名薬出ルノ由」「藤政カンノ虫灸治沙汰ス」このカンは疖であろうが、わが国では中医学で言う疖よりは限定された意味で用いられている。

気力虫というのは気力を食ってしまう虫というものを想像していたのであろうか。「平胃散ハ気力虫等ニ然ルベキタヤスキ薬」という用例があり、日常使われていた病名のようにである。

この他にも体の不調を虫にかこつけている場合が多い。現代でも虫の居所が悪いなどと言う通りである。昔は実際に寄生虫症が多かったわけであるが、本当の虫であったかどうか判別することは困難である。

（七沢リハビリテーシヨン病院）